

【授業の概要】

保育教育において、発達心理学をなぜ学ばなくてはいけないかということを理解し、子どもの発達の基本的な道筋について学んでいく。

【授業要旨】

回数	大項目	小項目	授 業 内 容 (留意点、テスト、レポート、作業、参考文献、教材等)
第1回	オリエンテーション		この講義で扱う分野の輪郭と、他の専門との関係について説明する。
第2回	発達心理学の概説	発達という概念	人間を捉えるとき、発達という概念は、不断の変化を意味することを理解する。
第3回		子どもにとっての発達	乳幼児期は、成長に伴う変化の大きい時期であり、そのため、発達を理解することが重要である。
第4回		発達の目標	子どもの発達の目標は、単に大人になることではなく、充実した現在の積み重ねの結果として表れてくることを学ぶ。
第5回	発達の道筋	生得性	人間という種特有の生得性とは何か、を学ぶ。
第6回		乳児期	乳児期の子どもにとって、「内外未分化」という状態の重要性と、そこにおける身近な大人との相互作用のあり方を理解する。
第7回		一歳児	内外未分化の状態から抜けていくときの身近な大人の「安全基地」としての役割を理解する。
第8回		2～3歳児	一般に「反抗期」と呼ばれる時期であるが、なぜそのように呼ばれるのかについて学ぶ。
第9回			この時期は、自我の芽生えの時期である。人間の自我というものの考察を合わせながら、その芽生えについて学ぶ。
第10回		幼児期後半	幼児期の後半になると、自分をふまえて、他者との関係を作り始める。そこでは、いざこざやトラブルがありながら、人間関係の調節をしていくことを学ぶ。
第11回			「ごっこ」の世界を学ぶ。見立てや、自分を何かに見立てるということによって育つ「象徴形成」を理解する。
第12回			物を媒介とする「ごっこ」の時期から、ルール遊びへと移行する時期。ごっこ遊びとルール遊びを対照しながら、発達の姿を追う。
第13回		学童期	学童期、思春期は、直接保育の時期とは重ならないが、長いスパンで発達を捉えるために、発達の特徴を理解しておくことが必要である。学童期では、特に、「ギャング」について学ぶ。
第14回		思春期	思春期の特徴は、自我が確立することである。そのために大きな危機にもさらされる。思春期を乗り切る意味を学ぶ。
第15回	まとめ及び評価	まとめ及びテスト	

【評価の方法】 出席、授業態度、レポート、試験等によって行う。

【テキスト】『保育心理学Ⅱ 子どもと保育』大場幸夫・前原 寛編著 (東京書籍)